

『赤松記』考

嘉吉の乱関係軍記の一考察 続

松 林 靖 明

一

室町時代から戦国時代にかけて、同一の事件・合戦を題材に何種類もの軍記が生み出されることが屢々あり、その結果、同名でありながら敵味方別々の視点・立場から書かれた軍記が生まれたりした。また先行の作品から本文を大胆に借用して、新たな作品を作り上げてしまう場合もあって、名称が違っていても本文的には極めて近い作品も多い。しかし、先行作品から本文を借用しているからといって、同一の立場に立つものとは限らず、敵方の視点に立つ作品の本文を借用する場合もないわけではない。このように室町軍記・戦国軍記と呼ばれる軍記は、

異本の範圍に取まるのか、別個の本と見るべきなのか、類書と位置付けるのがよいのか、そのありようは複雑である。

嘉吉元年（一四四一）に起こった赤松一族による將軍足利義教暗殺事件、嘉吉の乱を題材にした多くの関係軍記も複雑なあり方を示している。以前、私は嘉吉の乱を題材にした多くの軍記の中から、最も長編の静嘉堂文庫本「赤松盛衰記」三巻を対象に、上巻と中巻に重複して載っている嘉吉の乱の顛末を描いた章段を検討した。前稿^註では両章段を比較して、その性格の違いと成立時期の問題を考えてみたのだが、その時点では上巻巻頭に置かれた「赤松満祐嘉吉之乱」（中巻を持たない龍野市歴史文化資料館本も、上巻にこの章段を置く。）と同文的関係にあって、相互に近いと思われるいくつかの作品についての検討

は出来なかった。本稿では前稿の残された課題として、『赤松盛衰記』上巻「赤松満祐嘉吉之乱」と同文的関係にある「赤松記」(実祐本)・「普光院軍記」・「嘉吉乱記」・「嘉吉之乱」のようになる。

(広峯ツギ本)の五本間の相互の関係と、その特色を考察する。まず、これら五本の記事の有無と配列を表にまとめると、次

記事対照表

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
赤松記(実祐本)																	
天地開闢以来、日本は神軍により安全(序) 満祐、上意に違うも、不忠なき旨を上申 播磨・備前・美作拝領の経緯 義教、所領の下賜・召上げは將軍の権利と放言 満祐、謀反を一門に諮る 上原対馬守の諫言 義教を暗殺 書写山坂本に一門結集、戦勝の願書を奉納 井原武衛を担ぎ出す 幕府に対し挑戦状を送る 赤松追討の繪旨下る 坂本に不思議な出来事 幕府軍、播磨に進攻 明石人丸塚の合戦、教康の奮戦																	
普光院軍記																	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
嘉吉乱記																	
△(大異)	○	△(大異)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
赤松系譜																	
△(大異)	○	△(大異)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
嘉吉之記 <small>正本</small>																	
△(大異)	○	×	←	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
心永三十四年の前例 義教の略歴官位																	

18	これに先立って、福巖寺の敗戦	○					
19	但馬口、その他の合戦	○					
20	赤松、牛の突合いに驚き、坂本を落ちる	○	→				○ (小異)
21	京都諸寺社で赤松追討の祈禱	○					
22	各地で敗退	○					
23	山名の熾烈な攻撃	○					
24	依藤の最後、辞世の歌	○					
25	赤松義雅の最後、辞世の歌	○					○ (小異)
26	教康伊勢へ脱出と死	○	←				○ (小異)
27		×					
28	神々の出陣により戦勝	○	←				
29	或人の漢詩	○					
30	「上意刎首之後仏神祈念之事」	○					
31	義教の首、浄土寺に葬らる	○					
32	落首二首	○					

○はほぼ同様な記事があることを、△は同じ出来事だがかなりの記事の相違があることを示す。×は該当する記事がないことを、→←は同様な記事が他の所にあることを示す。

この表を比較してみると、大体以下のように五本の関係が読み取れよう。「赤松記」(実祐本)と「普光院軍記」とが、極めて近い関係にあること(第一グループ)。「赤松盛衰記」上巻「赤松満祐嘉吉之乱」が一部に相違を持ちながら、比較的近い関係にあること(第二グループ)。「嘉吉之乱」(広峯本)は五本の中では一番異同が大きい、それで

も第二グループのほうにより近い関係があること。

そこで第一グループからその特色を見てゆく。

二

「赤松記」(実祐本)は、内閣文庫に蔵されている写本で、外題に「彰考館本 赤松記 系図附 全」とあるように、彰考館の本を書写したものと思われるが、彰考館自身に今はこの本が残されておらず、その意味でも貴重である。なお表紙裏には「群書類従中赤松記アリ。確實ノ書ナリ。此書甚遺漏ヲ補フ者ニ似タリ。猶後考ヲ待ツ。史料採用ノ時ハ別本二字ヲ冠スベシ。」と注記されているように、「群書類従」所収の「赤松記」とは、全くの別書である。また「普光院軍記」は従来あまり知られることがなかった本で、姫路市の英賀神社所蔵の写本である。

さてこの二本を較べてみると、「普光院軍記」には「前書」が置かれているのが、最初に目につく違いである。それは、内題のすぐ後に本文よりやや小さめの文字で記された四行の短文であるが、次のようになっている。

普光院者、征夷大將軍足利義教之法名也、亦、敬、而号

御所也、大將軍尊氏五世之後裔也、爰ニ赤松大膳大夫満祐、同、子彦次郎教康有レ故而嘉吉元年六月廿四日奉討義教公軍記也。

「普光院軍記」にのみ見えるこの文は、赤松満祐・教康父子が將軍足利義教を討つたのは、「有レ故而」のことだったと断っているところに、この本が書かれた意図を見て取る事が出来るかと思ふ。

そこで次に、両書の細かい相違を見てゆくことにする。その始めは人名である。

「赤松記」(実祐本)

又山名左京大夫子息右衛門佐謀叛ヲ発ス。尊氏御舎弟兵衛佐ヲ大將軍ト取立テ貴上。

「普光院軍記」

又山名左京大夫時氏子息右衛門佐師氏謀叛発、尊氏御舎弟左兵衛督直義大將軍取立テ貴上。

と、「赤松記」では官職名だけだが、「普光院軍記」は官職に統けて名前が記されている。この外に「赤松上総介(義則)」「彦次郎(教康)」等、赤松氏に関しても同様である。これは一般的に考えて、官職名だけで人物を特定できた段階と、名前まで入れないと分かりにくくなった段階との時間的差異の現われと

して理解できるだろう。

また「普光院軍記」は、付箋や貼紙を多く持ち、書き入れも随所に施されている。これは本文を注解しようという意図によるもので、例えば「神南陳」に「近江国神南也」、「二番赤松勢」に「上総介義則也」等々の傍注を付している。その中で注意したいのが、例えば「不可如之」の「如」に付された「加」など、異本とのかなりの数にのぼる照合である。これは先の人名と同じで、時間的経過のために理解しがたくなった事項の正確を期したものと考えられる。

「赤松記」と「普光院軍記」との相違で、次に着目したいのは、本文中に二ヶ所「普光院軍記」独自の文章が存在することである。その内の一つは、対照表の11「書写山坂本に一門結果戦勝の願書を奉納」の箇所の末尾にあるもので、「普光院軍記」には、

其ノ外爰ニ広峯山牛頭天王者播州ノ大社依レ為ルニ嚴重殊勝之靈地、所願圓滿之神地、性具父子殊ニ信仰不レ浅祈願之為ニ一七日被レ籠心中之祈誓雖ニ様々成ニ、瑞夢不レ宜而掃陳有レ之トカヤ。

という一文が置かれているのである。将軍義教暗殺後、本拠地の播磨書写坂本に戻った満祐・教康は、一門を集め結束を固め

た上で、書写山の如意堂に「当秋中賣上花洛、致敵心凶徒等悉令討戮追罰、奉崇彼源武衛將軍、吾等一門為天下管領、永繼箕裘之業事、立所令遂其宿願」と赤松一族の野望を祈願するのであるが、「普光院軍記」はさらに広峯山の牛頭天王にも祈誓のため参籠した一件を載せるのである。

これらのことから、「赤松記」(実祐本)と「普光院軍記」の関係は、明らかに「赤松記」の方が「普光院軍記」より先行するもので、「普光院軍記」は「赤松記」(実祐本)が、それに極めて近い本)を元に「前書」を置き、官職名だけでは分かりにくくなった人名を補い、異本を参照しつつ正確を期し、広峯牛頭天王参籠譚を加える等、部分的に書き直して成立したものと考えられる。

三

それでは、「赤松記」(実祐本)はどのような特色を持った作品なのであろうか。この「赤松記」は、現存する唯一の内閣文庫本も、「明治十五年四月廿五日華族徳川昭武蔵書ヲ写スニ二級写字生柳井修三ノ同年五月十八日 五等掌記滝沢規道校」とあるように、近代になってからの書写であり、奥書等からそれ

以前にも数次の転写が行われたことが分かる。この「赤松記」は内題の下に「此作者不知、実祐拔書之」と記されており、尾題「赤松記」の後の奥書(対照表31)にも「右少々拔書也」とある。さらに付録の系図の前に置かれた奥書にも「天正十七年己丑八月(中略)十妙上人長吏清浄心院僧正実祐八十五書之」と記されている。これらの記述を信じれば、この本は実祐なる人物の著作ではなく、原「赤松記」とでもいふべき作者不明の本から実祐が抄出したものということになる。

実祐なる人物については和田英道氏に詳しい考証があるのでそれによると、実祐は書写山円教寺の第一〇六世の長吏、永正二年(一五〇五)赤松一家衆の一つ大河内氏に生まれ、八十七歳で没した。この抜書を完成させた天正十七年(一五八九)は、死の二年前に当ることになる。

実祐が見た原「赤松記」は、如何なる立場から書かれた軍記だったのか。「赤松記」(実祐本)の序(表2)は、次のようになっている。

夫以天地開闢之始、伊弉諾伊弉冊之尊自凝島之垂跡、男女夫婦卜露レ密契ス。草木土砂ニ至ルマテ伶生長了。出雲八重垣之語、和国風俗トシテ令人倫於○(つと)版、其諺ハ人心源、自浪声閑、四海穩也。(一)

抑寿永・元暦逆乱并弘安四年之初秋中旬、既蒙古数万鞞押浮ブ。寒風靡レ旗、只如白。或撃鼓吹角貝響天地、如人民亡然トシテ失東西之処也。雖然院宣国々ニ官軍下着ス。頼哉、神軍帷幄翻天、万民軽一命云々。依之、異朝怨敵忽令追伐、此国安全云々。(2)

(1)で述べられているのは、日本は神代から穏やかに治っていたこと、(2)では内乱や外寇があっても神軍・官軍の力によって安泰であること、の二点である。この序に対して、「この序(一応、序としておく)は果して序としての意味を持ちえているか否か、あまり分明ではない」とする見解もある。しかし、義教暗殺後の赤松一族の敗退の展開を「赤松記」(実祐本)の記事で見ると、

①書写開山聖人の眷属乙若両天(「普光院軍記」では、乙九若九両天)が現われ、赤松の敗北を予言。(表15)

②各地で敗戦した赤松勢、京都の祈禱の効験による牛の突き合いに驚き、坂本を落ちる。(表20)

③京都の東寺・御室等で赤松父子調伏の祈禱続く。(表21)

④八月一日、三十番神に勅使。春日大明神・広田大明神出陣。京方效文、春日の字に変わる不思議。(表28)

と赤松を敗北へ追いやって行く過程で神仏が屢々顔を出す。中

でも、「春日大明神大將軍至城山、諸神御出陣云々」、「広田大明神ハ播磨へ諸神ト相共ニ御進発也」、「神軍ノ故ニ所々ノ合戦、京方小勢、赤松大勢ナレドモ毎度ニ打勝シト也」と記されるように、神々の出陣が赤松敗退の最大の原因としているのを見落すことは出来ない。これは序文の、日本は神により安泰で、神国だから怨敵も滅びるとする考えと揆を一にしており、やはり序の働きを明確に持ったものと考えざるべきであろう。

「赤松記」（実祐本）には、將軍暗殺を決定した満祐を上原村馬守が長々と諫める場面があり、また播磨にもどつて井原武衛（足利義尊）を担ぎ出し、天下を奪おうと謀つたのを「是傍ニハ不異蜂蟻之命由、人々申合へり」と描く等、満祐の行動は先ず人間の口を借りて批判される。次に満祐が書写山に「天下管領」たらんとの野望を祈願したのを受けて、先述の書写開山聖人の眷属乙若両天が現われ、坂本退去を命じ、赤松滅亡の予言をし、さらに京都の東寺長吏・御室・雲護院准后等の調伏祈禱が暇なく行われたことを記して、仏教的方面からも赤松は否定される。見てきたように最後は神によって止めを刺される。赤松に將軍暗殺の如何なる正当な理由があろうが、乙若両天は「怨而無不前を酬」と言い残して忽然と消える。また、巻末の「上意刎首之後仏神祈念之事」には、「懸宿願於仏闍、致祈誓

於神社、全以奸曲至也。夫以神明仏陀者、宿正直之首」と、神仏ともに赤松に対し「奸曲至」ときめつけて二べもない。

このような視点を持つ作品を、赤松の側から書かれた著作と認めることは出来ない。たとえこの本を「書いた」のが、赤松氏ゆかりの実祐であっても、である。この本が、いわば反赤松の視点を持っているのは、実祐が「抜書き」した原「赤松記」の性格によるものと考えざるをえないのである。

さて、「赤松記」（実祐本）の奥書（表31）には、

右少々抜書也。又前後更互也。重言簡之、肝要集之。私云
普光院於恩賞之地、何無不忠、被召放乎。十余年之間以有
縁、雖被歎申、無御宥免。定而可為御後悔也。御首ハ於播
州浄土寺葬送之云々、御鉢ハ山名葬之、御衣計ハ於御所茶
毘云々。

と記されている。この奥書は尾題の直後に置かれており、実祐自身の筆になるものと考えられる。これによれば、原「赤松記」は記述に時間的不統一や重複があり、それらを訂して肝要な部分を抄出したものが本書であるという。「私云」以下は、実祐の個人的感想・意見で、不忠なきにもかかわらず恩賞の地を召し上げ、十余年の嘆願を無視し続けたあげくに暗殺された義教が、「御後悔」しているだろうというのだが、実祐が大河

内氏という赤松一家衆の生まれであることによる、赤松弁護の記述である。

四

以上のように、第一グループの中では、「赤松記」(実祐本)の方が「普光院軍記」より古い形を持っているのを見てきたわけであるが、第二グループの中ではどうであろうか。「赤松嘉吉乱記」と「赤松盛衰記」上巻「赤松満祐嘉吉之乱」とを比較してみると、「赤松盛衰記」上巻の方には「赤松系譜」があることと、赤松左馬助逃亡の記事の位置が異なっていることと二点が主な異同といえよう。この二番の関係を、和田氏も「鶴舞本」(「赤松嘉吉乱記」のこと、筆者注)の方が「赤松満祐嘉吉之乱」よりも古態的である」と指摘されているが、私も賛成である。私が根拠と考える一例を挙げると、戦いに破れた赤松教康は伊勢へ逃走するが、その地で自害して果てる(表27)。その首が京都に送られてくるが、「赤松嘉吉乱記」では、

其首ヲ取テ、閏九月二日ニ京都へ送り進上ス。其注文

赤松彦二郎教康

上月孫五郎

別所肥前守父子

原六郎左衛門尉

小河勘解由左衛門尉 櫛橋左京亮三人
多賀谷中務丞 稻谷豊前入道

別所助二郎

進上

右京大夫殿

と、記される。これに対し「赤松盛衰記」上巻「赤松満祐嘉吉之乱」は、

其頭を取て閏九月二日に京都へ送る。其人々は、赤松彦次郎教康・上月孫五郎……稻谷豊前入道・別所助次郎なり。

と、「注文」の形をとってない。つまりこれは、もとは原資料のままであったものを、地の文に書き改めたものと考えられ、その逆は考えにくい。

次に第一グループと第二グループとは、どちらがもとの形を残しているのだろうか。「赤松記」(実祐本)と「赤松嘉吉乱記」とを比較してみる。最初は記載されている赤松一族・家臣衆の名前の多寡である。

「赤松記」(実祐本)

去程ニ播磨書写坂元へハ赤松家一門悉諸勢馳集テ、其勢□
余騎、六月二十六日、性具・彦次郎軍評定有之。任嘉例テ
書写山へ祈禱事被申送。

『赤松嘉吉乱記』

去程ニ播磨ノ書写坂本へハ赤松ノ一族諸勢馳集テ、六月二十六日、軍ノ評定有之。先馳集諸軍勢二ハ、依藤・佐用・小寺・上月・浦上・楠橋・中村・太田・有田・間嶋・永良・宇野ガ一族・別所ガ一族・上原・安積・薬師寺・神吉・志方・英保・魚住……平野・飽間・荒田・私木田・大多和・志水・金沢等、宗徒侍八十八人、惣勢都合二千九百余騎ト聞ケル。性具・彦二郎、其外龍門寺・同伊予守義雅・左馬助・同彦五郎則尚、是ハ運枝ノ中也。各相談シテ先任嘉例書写山・広嶺へ御祈禱被申上、則願書ヲ被籠。

と、八十八の名前が列記されるのである(表11)。「赤松記」(実祐本)になくて、『嘉吉乱記』にある記事の内、比較的大きなものをもう一つ上げると、赤松教康の人丸塚の奮戦の場面(表17)である。「赤松記」では教康の弓勢のすさまじさに人々が感嘆し、まるで源為朝のようだと褒めた話を載せるが、『嘉吉乱記』は為朝の例を上げず、代りに、

敵モ是色メキ渡テ、シドロニ成テ見ヘケル所ニ、浦上・依藤・楠橋・中村・魚住・釜内・別所・鳴村等、雲霞ノ如キタル真中へ拔連テ切テ懸ル。寄手鶴翼ニ開テ中ニ包、討ントシケレドモ、赤松家一騎当千トモナレバ、東ヨリ西へ破

通り、北ヨリ南へナヒケ、能敵ト思フヲバ馳躰テ組テ落テハ首ヲ取。アハヌ敵ヲバ一太刀打テ懸テラシ、相戦間、細川勢三千余騎ワツカノ小勢ニ懸立テラレ、須磨ノ塩屋、敦盛塚ノ辺マテ引退ク。赤松勢人丸塚ニ陣ヲ取。

と記される。ここに見えるのも、浦上や依藤等の赤松一家・家臣団の活躍の話である。「赤松記」の筆者(抄本の作者)実祐は赤松氏ゆかりの人物であるから、わざわざ赤松一族の名前が列挙されている箇所や、赤松の活躍を描く場面を省略するとは考えられない。

また、『赤松嘉吉乱記』にあつて『赤松記』にない記事の一つに、赤松左馬助則繁の筑紫および朝鮮半島への逃亡の記事(表26)がある。赤松則繁はその後再び日本に帰つたものの、筑紫で殺された。文安五年(一四四八)のことで、嘉吉の乱から七年後のことである。「赤松記」(実祐本)にないというところは、原「赤松記」にもなかったものであろう。実祐が赤松氏に関わる記事を省略するとは思われないからである。

一方、『赤松記』(実祐本)に詳しく、『嘉吉乱記』には簡略にしか書かれていない記事もある。坂本に戻り勝戦気分に分酔う赤松のもとへ書写山長吏の使いと称する不思議な童子が現われる記事(表15)であるが、その場面を『赤松嘉吉乱記』は、

従書写山長吏御使トテ、⁽²⁾鬚ツラ結タル童子来テ、色々ト教
康ト問答ノ事有テ、此坂本ヲ立去給ヘトテ、一首ヲ詠ズ

⁽³⁾問答如之。

と記している。傍線と割注の部分は注目すべき点かと思う。何
故ならこの部分、「赤松記」(実祐本)では、

書写山長吏ヨリ御使トシテ鬚ツラ結タル童子二人来テ伺候
ス。是非ヲモ不申出、漸有テ教康問曰、汝等兩人、敵陣ヨ
リ為見聞来歟、不然変化ノ身歟、如何。其事ヲバ不入耳聞
只サメノト泣居タリ。良有テ云、長吏申候、夫円教寺ハ
高鳳第二建立、一条院御勅願、遙六百余廻星霜也。……仍
当山ノ釐有合戦、吾山頭密仏法滅亡不可有疑。一門沈奈梨、
経無量劫、不可有出期。願此在所ヲ立去給ヘ。仏法ヲ残吾
山給ヘトテ、一首詠之。

とあつて、『⁽⁴⁾嘉吉乱記』がいろいろ問答はあつたが「省略」
したという、その「問答」が「赤松記」(実祐本)には、はっ
きり書かれている。

以上のことから、「赤松記」(実祐本)の方が、『⁽⁵⁾嘉吉乱記』
より先行することは明らかである。つまり第一グループの方が
古態を持ち、第二グループはこれを改変・改訂したものといえ
るだろう。

ところで、『⁽⁶⁾嘉吉乱記』が古いものと考えられていた根拠
の一つは、その奥書であろう。それは、

此記者其時書写山ニテ謄置故如斯世ニ伝フ

というもので、「其時」が嘉吉元年の六月から八月にかけての
「乱」を指しているであろうが、前述のように乱後七年も経
つた赤松則繁の逃亡と処刑を記しているところから、この書写
奥書は後の人の推量を記したもので、成立の事情を伝えたもの
というよりは本の伝来を語つたものと見るべきであろう。

五.

次に第三グループに分けた『嘉吉之記』(広峯本)の位置付
けであるが、この本は嘉吉の乱を記述した前半部と先祖赤松円
心の南北朝時代の活躍、および幕下である広峯氏にまつわる文
書を集めた後半部とに分れる。この本は現在所在の確認が出来
ず、東京大学史料編纂所蔵の謄写本の奥書には、「播磨国飾東郡
広峯山広峯ツギ藏本、明治廿一年五月編修長重野安譚採訪」と
あるところから、広峯神社に伝わった本と考えられている。前
掲の対照表を見ると、他本にあって、「嘉吉之記」(広峯本)に
ない記事は、12「井原武衛を担ぎ出す」、13「幕府に対し挑戦

状を送る」、15「坂本の不思議な出来事」の三つ、この「嘉吉

りも詳しい。

之記」と「赤松盛衰記」上巻「赤松満祐嘉吉之乱」だけが載せ

「赤松記」（実祐本）

ない記事が、8「上原対馬守の諫言」である。これらの記事は、

爰ニ御所奉成テ、終日饗応シテ、七珍万宝ヲ奉備種々御酒

幕府に対し反乱を宣揚したり、赤松を諫め、敗北を予言したり

宴、觀世大夫猿樂芸能之半、内者共爰ニ相囀ナレバ切出、

する記事である。赤松にとっては、どれもいわば耳が痛い話で

上ノ御首ヲ給テケリ。

ある。これらの話を欠く一方で、「嘉吉之記」（広峯本）の方が

其日ニ至テ御所ヲ奉レ成、終日饗応シテ、七珍万宝ヲ奉レ

詳しい部分もある。赤松備前拝領の由来を説くところで、

備、種々ノ御酒宴、觀世大夫芸能半ニ、満祐舎弟左馬助御

一味同心ニ切懸ル。赤松勢是ヲ見テ、谷ヲ相隔、差詰差詰

手ニ取付、彦二郎左ノ御手ヲ取バ、赤松家来安積伊勢守時

射落。又一陣ヨリ切懸ル。時ニ敵勢数百騎被引退。

治、御後ヨリ御首ヲ給テケリ。

「嘉吉之記」（広峯本）

「嘉吉之記」（広峯本）

山名師氏一戦打負引退見ガ、又取テ引返、一味同心備作叫

至其日ニ、義教將軍ヲ満祐宅渡御、猿樂見物酒宴設、終日

テ掛、赤松勢是ヲ見テ、谷ヲ隔、差詰々射落。矢種尽バ貫

為饗応七珍万宝奉備、種々之御酒宴、觀世大夫芸能最中、

連テ、鎧ノ袖ヲ重、十死一生ニ掛破、軍為馴赤松勢、命限

既之馬ヲ放テ、其騒之紛ニ門ヲ閉、満祐弟左馬助右之御手

勁バ、敵兵多討取、残者共散軍ス。

ニ取付、彦次郎左之御手ヲ取バ、義教卿驚給処テ、赤松家

軍をし馴れた赤松の懸命の活躍が強調されている。

と、他本に較べ義教暗殺の場面が詳細で、具体的になっている。

同様に、「嘉吉之記」（広峯本）は、全体が簡略で記事量も最

さらにまた「嘉吉之記」（広峯本）にしかない記事が、二箇所

も少ないにもかかわらず、將軍義教暗殺の場面は第一グループ

ある。対照表の6「応永三十四年の前例」と10「義教の略歴官

の「赤松記」（実祐本）や第二グループの「嘉吉乱記」等よ

位」の二つである。「前例」とは、応永三十四年、將軍義持が

一族の赤松持貞を寵愛、満祐の所領を召し上げようと企んだ事件であり、赤松の反逆を是認する根拠ともなる記事である。

以上、この「嘉吉之記」(広峯本)は、同文関係にある五本の中でこの本にしかない記事が二つ、逆にこの本だけが欠く記事が三つあり、他本に較べ異同の幅が大きい。これはこの本独自の編集の結果と考えるべきものと思う。その編集の意図は、いうまでもなく赤松擁護である。それでは「嘉吉之記」(広峯本)が依拠した本文は第一・第二どちらのグループであろうか。一例として赤松の城山への撤退場面を挙げる。

【赤松記】(実祐本)

其夜放牛十匹計突合ケルヲ、山名金吾押寄タルトテ、取物モトリアヘズ書写坂元落退レシ了。是モ京都ノ祈禱ノ故云々。

【^本嘉吉乱記】

其夜放牛十匹計突合ケルヲ、山名金吾寄タルトテ、取物モ不ニ取敢一、書写坂本ヲ私、揖西郡木ノ山ノ城へ引帰ル。

赤松程成勇将方如レ此敵ニ恐ル、ニ不レ非事ナレドモ、是モ京都ニテ諸社諸寺ニテ赤松父子調伏アル故ト、其比世上ニ沙汰云アヘリ。

【嘉吉之記】(広峯本)

其夜放牛余多突合ケレバ、山名金吾為寄トテ、取物モ取ア

へズ、自書写坂本、揖東郡木山城へ引籠ル。赤松程之勇将、如此敵ニ不恐事成共、背天理奉君ヲ討ル故、心モ臆病ニ成見ニヤ。

赤松勢の坂本落ちが、京都の祈禱のためとする「赤松記」。諸社諸寺の調伏によって木山(城山)に後退と記しながら、赤松への褒詞をも併せ載せる「^本嘉吉乱記」。調伏を全く記さず、臆病になったのは主君を討つたせいかと、一般論を疑問形で記す「嘉吉之記」(広峯本)。この三つを並べてみれば、成立の順序、依拠した本文も明らかで、「嘉吉之記」(広峯本)は「^本嘉吉乱記」など第二グループの本文に依つたものであることが分かる。

六

以上の検討から、同文関係にある上述の五本の成立は、①赤松を追討する側から、原「赤松記」が早く書かれ、②これをもとに実祐が抄本を作った。ここには殆ど実祐の加筆は認められず、尾題の後に奥書の形でわずかに感想を述べた程度であった。③実祐本「赤松記」をもとに、分かりにくくなった人名等を補った「普光院軍記」が書かれる一方、④神軍の冥助を語る「序

文」を取り除き、本文中の諸社の祈禱記事をも削った、より赤松弁護的「赤松盛衰記」が作られた。⑤この本から播・備・作三国拝領の由来を省き（理由は不明）、巻頭に赤松系図を付けたものが、「赤松盛衰記」上巻に取められた。⑥また、さらに赤松擁護色を強めた「嘉吉之記」が、「赤松盛衰記」から赤松が神罰に当たったとする原作の意図を殆ど削除した形で作られ、広峯氏の文書と併せて「嘉吉之記」（広峯本）としてまとめられた。と、このような道筋が窺われる。

注目すべきは、②から⑥までの段階の全てに渡って、赤松氏あるいはその家臣の子孫が関与していると思われることで、彼らは依拠した本文を少しずつ変えることによって、赤松擁護を指摘した。しかし、もとより將軍暗殺の事実は変えようがなく、その神罰・調伏―神仏による滅亡というイメージをいかに薄めるかに腐心した結果が、このように多くの作品を作り出して行った理由の一つかと思う。なお一言付け加えるならば、この流れの行き着く先の一例が、「嘉吉之記」（広峯本）をもとに赤松幕下白国氏の子孫によって書かれた「赤松嘉吉年間録」（浄嘉堂文庫本「赤松盛衰記」中巻）であろう。

このように考えることによって、これらの本が赤松擁護と將軍弑殺非難という「矛盾」を内包しなければならなかった事情

の一面は解けるかと思う。その意味では、今回検討の諸本は、「成立の当初から敗者赤松氏側に立って叙述された」といって「嘉吉物語」とは対極をなす軍記といえよう。

ところで赤松一族は、將軍暗殺の十七年後の長祿二年、御家再興と引換えに神皇奪還のため南朝皇子二人を弑殺するといふ、赤松擁護とは「矛盾」する行為を再び敢行する。赤松関係の軍記の中で、嘉吉の乱（將軍暗殺）だけをその視野に入れた作品と南朝皇子弑殺をも叙述の範囲に入れた作品としては、自ずから性格が異なるであろう。「赤松略記」や「赤松記」（定阿本）など、改めて検討を必要とする作品はまだ多いのである。

注

- 1 拙稿「嘉吉の乱関係軍記の一考察―「赤松盛衰記」をめぐる―」（『甲南国文』40 平5）
- 2 矢代和夫・萩原康正氏「原典翻刻・赤松記」（『室町軍記総覧』明治書院 昭60）
- 3 白崎祥一・萩原康正・矢代和夫氏「翻刻」英賀神社蔵本「普光院軍記」（『古典遺産』34 昭58）
- 4 「普光院軍記」のうち一つの独自の文章は、巻末近くの「上意勿首之後仏神祈念之事」の後半部分で、「赤松記」（実祐本）「神受三熱之苦、天上有五衰、人間愁八苦、系教主釈尊モ御足ヲ被打達多、神通目速殺竹外道云々」に続く、「奏始皇亡項羽、

項羽亡漢高祖、越王勾踐討吳王夫賤、上宮太子亡守屋、況於人間乎。業因得果之道理、難遁者也。我人恐世、全身、折現世、可願後世也云々。」を載せるが、本来あったものが、転写の際に脱落・省略されたものか。

5 和田英道氏「嘉吉物語」の形成」(国文学研究資料館紀要)

1 昭50)

6 矢代和夫氏「よしか嘉吉乱記」補注(-)「人文学報」一四六

昭56)

7 注5和田氏論文。

8 注5和田氏論文。

付記 本稿を成すにあたり、矢代和夫先生・萩原康正氏から資料の提供を受けた。記して謝意を表す。